２０２３年8月１３日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ１０「信仰は生きる力」
詩編５５：２３、ローマ５：１～５

問２７神の摂理について、あなたは何を理解していますか。
答　全能かつ現実の、神の力です。それによって神は天と地とすべての被造物を、いわばその御手をもって今なお保ちまた支配しておられるので、木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしい御手によってわたしたちにもたらされるのです。

父なる神さまを信じるとき、信仰問答は単に天地創造の御業だけではなく、摂理をあわせて考えています。創造と摂理は切り離せません。創造とは神さまがこの天地万物を無からお造りになられたことですが、摂理は神さまがそのお造りになられたものを「今なお保ちまた支配しておられる」ことです。車で道を走っておりましたら看板に「売りっぱなしにはいたしません」と書いてありました。そのお店は電気屋さんのようでしたが修理などのアフターサービスをするのでしょう。商品を買った者は安心いたします。神さまはこの世界を造りっぱなしにはなさいません。最後まで責任をもたれます。当然、壊れたら修復してくださる。保つということはそういうことです。

信仰問答では摂理を「全能かつ現実の神の力」と表現します。被造物を保ち支配するために神さまは全能の力を発揮されます。新約聖書に金持ちの青年の話があります。イエスさまが「神の国に入ることはなんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」とおっしゃった。すると弟子たちが「それではだれが救われるのだろうか」と言うと、イエスさまが「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」（マルコ１０：２５～１７）と言われます。人間の救いに関して、それはらくだが針の穴を通る方がまだ易しい。それほどに不可能なことなのです。けれども神さまはおできになる。それが全能です。その全能の力がわたしたちの現実にも豊かに働いているのです。「現実の」という部分を竹森満佐一先生は「今働く力」と訳します。何か特別な時にだけ働くというのではなく、今、わたしたちが生きる日々の生活の中に、神さまは全能の力を発揮しておられます。

それを具体的に信仰問答では「木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしい御手によってわたしたちにもたらされるのです」と言い表します。ここには自然も含め、わたしたちを取り囲むすべてがあると理解してよいでしょう。毎日の生活、それこそ食べ物、飲み物に至るまでそこにも神さまの御手が働いている。すべてが救いのために働くのです。そんな小さなことまで？と思われるかもしれない。でもよくよく考えてみれば、ごはん茶碗一杯のごはんもそれは決して当たり前ではありません。先日の台風で沖縄では食べ物を輸送する手段が途絶えて食品が品薄になりました。また水害で田んぼが水に浸かればお米ができないのです。コップ一杯の水も断水して飲めない時があるのです。地震の時にもそのことをわたしたちは身をもって経験しました。そのコップ一杯の水にも神さまの御手が届いている。だからわたしたちは感謝していただくのです。

しかも「父親らしい御手によってもたらされる」とあります。これは先週の三位一体の父と子の関係を思い起こしていただくとよいですが、日々の生活が何か得体の知れない恐ろしいもの

によってもたらされるのではなく、「これはわたしの愛する子」とイエスさまに向かって呼ばれる父なる神さまの深い愛の中でもたらされるのです。またそれは「求める者に良い物をくださるにちがいない」（マタイ７：１１）という天の父に対する子の深い信頼のことでもあります。そのような父なる神さまの御手の中ですべては備えられているのです。

摂理には「前を見る」という意味があります。先を見る、見通しです。わたしたちの親子の関係でも、親は子より多少人生経験がありますから、ある程度、先を見通すことができるでしょう。こうしたらこうなることを予測できます。危険だと思えばしないように諭しますし、先を見て必要だと思えば与えたり、必要ないと思えば我慢させるのです。神さまはそんなわたしたちよりはるかに先を見通せるお方です。それは終末の完成を見据えています。その中で今わたしたちに必要なものを備えてくださる。食べ物も飲み物も、この夏の暑さも、健康も病気も、良いことも悪いと思われることさえ、それは神さまの御手の中にある。そのように信じて歩むなら、わたしたちの生き方は大きく変わってくるのではないでしょうか。

問２８神の創造と摂理を知ることによって、わたしたちはどのような益を受けますか。

答　わたしたちが逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来についてはわたしたちの真実な父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということです。なぜなら、あらゆる被造物はこの方の御手にあるので、御心によらないでは動くことも動かされることもできないからです。

ここでは創造と摂理を信じることの益として「忍耐」「感謝」「確信」の三つがあげられます。ここに信仰者の生き方が表されています。神さまが将来の完成を見据えて、すべてを備えてくださる。雨もひでりも、食べ物も飲み物も、健康も病も、日々直面する課題も、たとえそれが修復困難な状態であっても、神さまがすべてを用いて完成に導いてくださいます。万事を救いのために益としてくださるのです（ローマ８：２８）。そのために神さまは御子イエス・キリストを与えてくださいました。全能の神さまは、救われるはずのないわたしたちをイエスさまの十字架とよみがえりの御業によって神さまの御国に迎え入れてくださいます。

人生なかなか思い通りに行くことはありません。道半ばで挫折することもあります。しかし今の困難も神さまが救いのために用いていてくださると信じるなら、そしてイエスさまのゆえに完成へ導いてくださると信じるなら、わたしたちは希望を持って前に進むことができるのではないでしょうか。今日はロマ書の御言葉「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマ５：３～４）という部分を読みました。たとえ苦難の連続であっても、すべてを完成へと守り導く神さまの深い摂理を信じること、そこにわたしたちの揺るぎない人生の基盤があります。だからどんなことも耐えることができる。神さまに感謝し、神さまを信頼してわたしたちは生きていくのです。

天の父よ。この天地万物を造られた神さまが、この造られたものを最後まで、完成まで守り、保ち、導いてくださる幸いを感謝いたします。そのために御子イエス・キリストが与えられました。その恵みの中に、深い摂理の中にあることを信じて、困難の中にも希望を失うことがありませんように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。